## X-X ゆかたの着装体験を通じ伝統文化の伝承をめざした教育プログラムの開発

2 3

1

横浜国立大学大学院 教育学研究科 家政専攻 〇大矢 幸江(指導者 薩本 弥生)

4 5 6

7 8

9 10

11

【目的】2006年の教育基本法の改正では、日本の伝統と文化を尊重し、国際社会での役割や態度等を育てる目標が示された。それを受け、中学校の家庭科の学習指導要領では、「和服の基本的な着装を扱うこともできる」が盛り込まれた。研究室では「ゆかた」の着装を通した教育プログラムの開発に取り組んでいる。本研究では中学・高校で授業実践を行い、きもの文化への興味関心や理解に対する共通点や違いを明らかにし、ゆかた着装後の授業で何を扱うと効果的か提案することを目的とする。

- 【方法】ゆかたの着装を含む授業実践およびきもの文化への興味等を調査するアンケート実施
- 12 平成 25 年: 附属中 1 年生 134 名、公立中学 2 年生 154 名
- 13 平成 26 年: 高校 2 年生 221 名、高校 3 年生 21 名、公立中学 1 年生 132 名 計 662 名
- 14 授業内容:ゆかた着装の授業、通過儀礼ときもの文化、ファッションショー等
- 【結果・考察】授業前後のアンケートより中学・高校の共通点として、きもの文化への興味関心は伝 15 統文化への興味や経験と関係が深いと示された。相違点としては中学・高校で以下のことが示され、 16 17 着装後の授業内容を提案した。中学生は学年が低いほど落ち着きがなく理解度は低いが、ゆかたを着 18 ていつもと違う自分を発見して高揚感を感じた。よって、ゆかた着装後の授業では、まずは理解習得 よりも体験重視による体で感じる内容が有効であるとして、立ち居振る舞いなどを提案した。それに 19 対し高校生は精神的に成長度が高く、自分の着つけの評価もしていた。ゆかたの理解から文化面や構 20 成面の学習などより深い内容へつなげ、主体的に発表したりテーマを決めて調べたりする授業が提案 21できるとした。家庭科の担当教員は学習効果が見られるので今後も工夫を加えゆかたの着装授業を継 22
- 23 続することを希望した。最後に伝統文化の中のきもの文化を学習する教育的意義を考察した。